大阪の名門トップ公立校は各学区でゆるぎない地位を確立していた。しかし、私の受験期はちょうど学区編成の最中で、居住所からの出願は、水面下で志願者調整が割り当てられていたのが実際だ。僅かな調整学校という措置があって、私の居住地区は正にその調整区域であり、トップ高への割り当て人数が制限されていた。しかし、毎年安定的にトップ高へ合格者を送り出していたので、私も何ら疑うことなくトップ高への受験を目指し、受験勉強に邁進していた。そんな中、冬休みを間近に事件は起こった。いつものように帰宅して一段落したところ、母親に唐突に志望校の変更を説得されたのだ。
絶対に私の合格を信じて応援してきた母に異変を問い正すと、どうやら学校から呼び出しを受け、担任から志望校変更を受託するように説得させられ約束してきたようだ。私が許せなかったのが、私同伴だと話が纏まらないことを見越して、陰で親だけを呼び出し、私抜きで進路を決めたことだ。
当時の学校の先生の権限は絶大で、ましてや外から異端視されないように努めてきた私の母親が、学校の先生に異議を申し立てる訳がない。そんな理不尽な事後報告を飲まざるを得ない状況に、翌日私は学校で荒れ狂った。まず、担任に陰で志望変更させた汚いやり方を、授業中に声を荒げて徹底して糾弾した。『先生に、俺の夢や人生計画を断念させる権利があるのか!』と食って掛かった。担任は『お前の内申点では絶対に無理だ』と反論し、更に『お前の不合格は見てられないからだ』と諭す言葉にブチ切れた。これまでの素行や授業態度も実際に酷かった私の急所をついて、納得させようとする担任に、『もし不合格になっても、俺の人生やからチャレンジさせろ。戦わずして負けるのは嫌や!』と私も引き下がらない。『もう親の了解も得たから決まったんや。だから諦めろ…。』保身が見え見えの大人の都合に納得できる訳がなく、延々と食い下がる私は、挙句に授業妨害だと言われたので、『こんなアホな授業なんて受けてられるか!』と、自ら教室から飛び出した。クラスメートの大半は私の応援をしていたが、進路決定の大切な時期故に、ガリ勉君たちの大半はそのまま教室に残った。しかし、私に賛同して飛び出してきたのが、進路なんて無関係の落ちこぼれのヤンチャ仲間の数人だった。成績は悪くても義理人情に厚く、仲間想いの彼らが本当に嬉しかった。徹底抗戦の覚悟で、担任から折れてきて話し合うまで戦うつもりでいたら、その日は無視されたまま、結果全ての授業をボイコットすることになってしまった。結局、体制に従わない異端児のレッテルを貼るだけで処理された私は、肩透かしを食らった格好になってしまった。流石にボイコットに付き合ってくれた仲間に、更にこのまま徹底抗戦に付き合わせるのは申し訳ないので、翌日から私は学校をサボって行かなくなってしまった。
人生を回想するときに、『~したら、~すれば』のタラレバは付き物だが、それは全く無意味だ。過ぎ去った時間は戻らないからだ。実際、私の高校受験は失敗だった。自分が設定した目標や志望する動機そのものを放棄させられたからだ。他者に人生を翻弄させられることがどれだけ空しいか15歳で味わった。もし、受験していたら、の想像は全く無意味だ。合格していたか、不合格かも、架空の設定では現実では無いので意味を成さない。チャレンジして、実際に経験して初めて人生の駒が進むことを痛感したので、今思えば逆に人生の指針ができたのかも知れない。以降、私は自分の信じる道を自分の判断で進むこだわりが増したのは間違いない。また、リスクを取らなければ大きな果実も得られないことも学んだ。
今でも教え子たちへの基本姿勢は変わらない。『自分の人生だから、後悔の無い受験をしなさい』や『進路で人生を変えるぐらいの受験をしなさい』は、今でも我が教室の合言葉になっている。
だから、我が教室では合格するか否かの[占い]は一切しないし、ましてや進学先を決める為の助言は皆無だ。『自分の行きたい志望校を合格して自分の母校にする』のが、一番理想で自然だからだ。もちろん受験だから、競争原理と過酷な現実と向き合わねばならない。動機が善で理想に燃える人生に不可欠な行きたい志望校が見つかれば、チャレンジしなければ結果も得られないのだ。いや、不可欠な志望校だからこそ力を付けて堂々と受験すれば良いのだ。だから、我が教室の進路指導はシンプルだ。受験したい志望校のレベルを凌駕するチカラをつけて受験しろ。たったそれだけだ。だから、教え子の受験日の前日まで、とことん付き合って指導のサポートをする。実際、当事者以外で出来ることはそれしか無いのも事実だ。その事件以降、私は学校に行かずそのまま冬休みを迎えてしまった。母は、自責の念からか進路について何も触れなかったが、突然投げやりに不貞腐れた私を、相当心配したに違いない。
正月も明けて、いよいよ三学期が始まるかという直前に、母は私に突然尋ねてきた。『お前に会わせたい人がいるの。一度、会ってみる?』と唐突に言われたことより、自分の事で心配させている母への後ろめたさが有ったので『別に…会ってもええけど…』と返事したら、『お母さんの大切な親戚だし、すごく忙しい偉い先生だから素直な気持ちでお話するんよ』と窘められた。そして『もし気に入れば、家庭教師を頼んであげる』と付け加えた。親戚と言われ、しかも先生なんて想像もしていなかったので、不貞腐れたまま、面談する日を迎えてしまった。
その出逢いこそ、私を根底から引っ繰り返す出逢いになるとは、夢にも思わなかった。その人は梁先生といって、大阪大学で助手をしている先生だった。在日では初めて若くして助手になったらしく、在日でなければとっくに助教授になれる若手研究者のホープだったらしい。同胞組織の科学者協会のリーダーでもあり、世界中の大学に論文発表で飛び回っていたバイタリティー溢れる凄い先生だった。数時間も先生の話に聞き入り、いろんな世界中のスケールのデカい話に、吸い込まれるように楽しい時間を過ごしながら、また私の中から沸々と言い知れぬエネルギーが湧いてきた。そして梁先生に、受験したい志望校を受けられない進路の理不尽さを、恐る恐る相談したら、『高校なんかあっと言う間だから、そこに固執せずに勉強の中身を充実させて、大学で行きたい学校に行けば良いじゃない?悩む時間が勿体ないよ。』加えて『お母さんからチラッと聞いたけど、将来は医者になりたいんだってね…。確か、今年の阪大医学部の合格者に、君の受ける予定の学校出身者もいたから、どこでもチカラさえ付ければ道は開けるから、そこで頑張っていけば良いよ!』と、私の悩みを一蹴して言い放ってくれたのだ。その一言で、それまで意識しなかった変更予定の学校に、急に親近感が湧いてきて、これまでのモヤモヤが一気に晴れて、気が付けば又心がスッキリと前向きな気持ちになっていた。帰り際に私は、梁先生と別れるのが寂しくなったのか、突然先生に懇願していた。『先生、僕絶対に医学部に合格したいから、週に一度でも、いや月に一度でもいいから、僕の家庭教師になっていろいろ教えて欲しい!お願いします!!』と…。大声を張り上げて頭を下げていたら、『よしっ、わかった。不定期になるかもしれないが、君の期待に応えられるように応援しよう。だから良い医者になれよ!』と快諾してくれた。後日談だが、学校も行かなくなった息子を心配して、遠縁の梁先生に大学受験の力添えを依頼しての面談は、私のヤル気と多忙な先生とのタイミング次第の前提でもあったので、成立しなければ途方に暮れたかもしれない、と母は笑っていたが、私の豹変ぶりと先生の快諾に、母親が一番喜び、嬉しかったようだ。
こうして私は、恩師の梁先生との出会いを契機に、半月程不登校になっていた学校に、又三学期から行くようにした。月に数度、我が家に来る梁先生との学習が何より楽しくて、私はまた勉強に没頭する毎日が始まった。何が楽しいかって、物事の考え方や、探求する過程の全てが興味深く、理論を裏付けに今学習している事を数次元も高所から落とし込む先生の話に夢中になり、納得し釘付けになった。毎回先生をギャフンと言わせようと、下調べして自分なりに高度な質問をしているつもりが、ことごとくアッサリと何時でも明快に説明してくれる梁先生の博識に驚嘆した。先生の研究生活の話や、超人離れした驚きの世界観にすっかりと埋没して、会う度に先生に憧れる日々であった。実際に家に来て頂けても、学習する私の横で先生は専ら自分の研究に勤しんでいるのが大半で、手取り足取り教わることは無かったが、共有する空気は、何事にも代えられないぐらい崇高で、私の珠玉の時間だった。[次回へ続く]

※中学時代に出逢った恩師二人のお陰で、座礁しかけた私の航海も何とか進めることができた。高校入学前に『少年よ、大志を抱け』とばかり希望を与えた大人の励ましは、回想すれば、その後に与えた影響は大きい。大人は子供にとって勇気の指針であり夢を具現化する存在であって欲しい、とつくづく思う…。